

玉潤「山市晴嵐図」(出光美術館蔵)



大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

画家・玉潤

千利休のまな弟子山上宗二が書いた茶の湯の教程本に、「山上宗二記」があります。内容は、唐物骨董の茶道具目録と言えるもので、大つば、茶わん、茶入れ、釜、香炉、花入れ、墨跡、絵など、計二百数十点に及ぶ名物が箇条書きでリストアップされています。

天正14(1586)年のものとされ、記されている名物の現・旧所有者として、「東山殿」(足利義政)、「総見院殿」(織田信長)、「関白様」(豊臣秀吉)などの將軍や大名と並んで「豊後の太守」の名が頻出し、ます。言うまでもなく、大友義鎮(宗麟)を指します。義鎮が所有した名物画の一つ

義鎮が好んで作品を収集

に、13世紀中国の画家玉潤の作品「山市晴嵐図」があり、重要文化財として出光美術館に現存しています。「大友興廢記」の「宗麟公御所持の茶湯道具ならびに絵讀の名物の事」条に、「一、玉潤 市の絵 八幅の内」と紹介されるように、この絵画は元来、「瀟湘八景図」の一つとして描かれたもの。「瀟湘」とは、中国湖南省の洞庭湖一帯の広大な景勝地のことを示し、「平沙落雁」「遠浦帰帆」「山市晴嵐」「江天暮雪」「洞庭秋月」「瀟湘夜雨」「煙(遠)寺晚鐘」「漁村夕照」の八つの画題のもとに、温潤な江南地方の自然や四季を描き出した中国山水画の傑作が瀟湘八景図です。その創始者は11世紀北宋の画家宋迪とされますが、玉潤による瀟湘八景図は、南宋の13世紀に描かれたものです。現存するのは「遠浦帰帆」「山市晴嵐」「洞庭秋月」の3図のみで、これらは巻物として日本に舶載され、室町幕府8代將軍足利義政の愛蔵品となっていたものを、義政が8幅に切断して掛幅装にしたと言われます。このうち、大友義鎮のもとにもたらされた「山市晴嵐図」は、手前にかかる橋から山腹の家屋、そして遠方の山々へと墨の強弱が施され、その間の山路を右手から登る1人と左手から登る2人の人物が墨の調子を印象付けています。義鎮は、墨象が印象的に点綴して空間の中に吸収されていく玉潤の作品を好んで収集したようで、豊後の豪商仲屋宗越が蔵した時期もあったようです。永祿10(67)年2月26日、「山市晴嵐図」を茶会で鑑賞した堺の豪商天王寺屋宗及は、「この絵一段墨黒なる絵なり、にぎやかなるか」と評しています。木も橋も山も粗放なタッチで描かれて明確な形を持たず、霧の中に見え隠れする山間の村を広い空間の中に描こうとする独特の技法は、茶室で観覧した人々を感嘆させたことでしょう。(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1回掲載